
十二精霊物語

山崎空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十二精霊物語

【コード】

N9951Q

【作者名】

山崎空

【あらすじ】

十二の精霊が治めているといわれる小さな島国の村娘アルバは、ある日拾うつもりもなかった汚れた人形を強制的に拾わされるはめになる。その日から、彼女の日常はいつもどおりとはいかなくなつて　　ほんの少しの間だけ日常から外れてしまった少女の話。遠い昔に児童文学の卒制で書きあげた発掘品です。

01・始まりは四月の精霊

残っていた雪もすっかり融けて、大地が新緑に芽吹く季節。

色とりどりの花はその蕾を膨らませ、今か今かと開花する時を待っていた。

空はよく晴れていて、絶好の洗濯日和だったため、家々の窓辺には、大量の洗濯物がまぶしいばかりに風にはためき輝いている。

事件はそんな日に起こった。

アルバは、その日もいつもと同じように井戸に水を汲みに家の外へと出かけた。

時間帯は昼。あちこちの家の台所から煙が空へと昇る。

家のすぐ裏手に、共用の井戸がある。

女たちが洗濯をするのもそこだし、炊事用の水を汲むのもそこだった。

子供達が遊びの合間に飲む水も、酔っ払いの顔にぶっ掛ける水も、全てその場所から汲まれる。つまりは、街にとって必要不可欠な場所でもあった。

井戸の前まで来て、もっていた木の桶をなれた手つきで紐につるし、井戸の中へ放り込む。

しばらくして水音が聞こえたら、滑車にかかった紐を両手で引っ張る。

そこまでは、アルバのいつもの日常だった。

あとは水をこぼさぬように家に戻ればよいだけだった。

違っていたのは、そこから。

アルバが汲み上げた桶から紐をはずしていると、なにか、左足に誰かに叩かれたような衝撃が来た。

ほんの軽いもので、痛みは全く無い。

それでも気になったから、アルバは自分の足元を、変色した煉瓦の石畳の上を見た。

「あれ？」

左足にもたれかかるように、彼女の膝まである大きさの人形が、置かれていた。

「人形？ おかしいな……ここに来たときは、何もなかったと思うんだけど……」

桶を石畳の上に一旦降ろして、アルバはその人形を抱き上げて見た。

赤い綿の糸の長い髪。少々大きい黒いボタンの目。麻布で作られたような、中に綿がつまっただらだらした肌。指は一応五本そろっていて、足には髪と同じ赤い色の靴をはいている。

元は綺麗な色だったろうに、今は薄汚れてにごっている空色のワンピース。

口は茶色い糸で笑うように縫ってある。

顔の大きさと、目のボタンのバランスが取れてないのか、どこかアンバランスさを感じる人形だった。

けれど、よくみれば、可愛いといえないことも、ない。

「……でもどうして人形が……」

普通に考えて、突然人形が自分の足にまわりついていたら、そ

れこそホラーである。

アルバは抱き上げていたその人形を井戸のすぐ下の石畳の上に、座らせるように置いた。

「きつと、ここら辺で遊んでる子の忘れ物よね」

それならば、自分が持つて帰るのはいけない。誰かが取りにくるかもしれないから。

もとより持つて帰る気などさらさらなかったのだが、何となく人形の黒い目が自分を恨めしそうに見上げているような感じがして、アルバは自分にそう言い聞かせた。

足にまとわりついていたのだから、最初からあった人形に気づかなかっただけで、何かのはずみに倒れ掛かってきたのだらうと、そういう事にして。

石畳の上の桶を持ち上げると、アルバは一目散にその場から逃げ出した。

厄介な物には係わり合いにならないに限る。それは人間だらうが人形だらうが同じである。

井戸の脇に置かれた人形は、そんな彼女の後姿を、いつまでもじっと見つめていた。

02・不可解な人形

夜は随分強い風が吹いていた。

よろい戸がガタガタとうるさく音を立てる。

アルバは二階の部屋の中で、蠟燭の長さを確認した後、そっと窓のほうをうかがった。

（変なの。昼間は風一つ吹いてなかったのに、急にこんなに吹くな
んて）

明日は雨でも降るのだろうか。

しばらくぼんやりと考えて、手元の本に視線を戻した。蠟燭はまだ半分ある。火が消える頃には、この本も読み終わっているだろう。

その本はアルバの家に昔からある本だった。読むのは、これが最初ではない。

子供の頃から何度も何度も、母親に読んでもらった。字が読めるようになってからは自分で読むようになった。お気に入りの本だから、今でもよく読んでいる。

本の内容は、十二人の精霊と一人の人間の男が、さまざまな冒険をする話だった。

陸の無い国を旅する話。強大な竜を倒す話。巨大な茸が生える森で、迷路に迷い込んでしまう話。一番最後のお話は、彼らが一つの国を作るといふものだった。最後にたどり着いた小さな島に国を作り、彼らはその国で末永く幸せに暮らす。

国は十二人の精霊と一人の男が治め、いつの日か何人も人間が

その国に移り住み、街を築き、栄えていった。

長い年月が過ぎて、最初に十二人の精霊と一緒にいた男はいつしか消え去り、精霊だけがその国に残った。精霊達は、一年を十二に分けて、順番に国を治めていく事にした。十二までいったら、一年がたち、また一番目の精霊に戻る。その繰り返し。

あとから移住してきた人間たちの中から代表を選んで、精霊達の言葉を、意思を、国中に知らせる任を負わせた。

だからその国は精霊が治めている。十二人の精霊達が。

それは、アルバが住むこの国に伝えられる建国記と同じ内容だった。

つまるところ、その物語は、この国に住む子供なら誰でも知ってる昔話で、母親から寝る前に一度は聞かされる話。

だけど建国記は、あくまで十二人の精霊達が国を作る話だけで、アルバの読む本にでてくるような冒険の話は無い。だから彼女はその本が好きだった。

(夢があるし、それにどきどきするじゃない)

まるで自分も一緒に冒険に出ているような錯覚におちいる素敵な本。

いよいよ本のページも残り少なくなり、アルバの瞼も重くなってきた。半分ほどあった蠟燭は、さらにまた半分になっている。

ああ、本当に眠くなってきた。

閉じかける瞼を、必死にこらえるのも、もう限界だ。

蠟燭の火を消そうと、アルバは息を吸い込んだ。その時、蠟燭の

淡い光の向こうに、どこか見覚えのある人形の影を見て、思わず息を止めた。

「ひっ！！」

短い悲鳴が口からこぼれた。声はそれだけしか出せなかった。人間、本当の恐怖を体験すると、どうやら声がでないようだ。

赤い光に淡く照らし出されているのは、間違いなく昼間に井戸で見た汚れた人形だった。

黒い目が明かりに反射してきらりと光る。

明らかに自立できそうに無い布の人形なはずなのに、その人形は勇ましく自らの足で床の上に立っていた。

アルバは魚のように口をパクパクさせ、座っていた寝台の端まで一気に後退った。

そんな。まさか。

人形に化けてでられるような真似はしたことは無いというのに、何故今自分の目の前にいるのか。

ホラーだった。

人形は一步、足を前進させた。アルバは後ろに逃げようとして、寝台から落ちそうになった。

なんとか部屋の外に逃げ出したい所だが、人形は扉の前にいる。寝台から降りたアルバは、壁際に逃げた。人形は黒い目をきらりとさせて、彼女を追ってきた。もはや恐慌状態に陥るなど言うほうが無理だった。

悲鳴は喉元までせりあがっていて、今にも近所迷惑な騒音が響くかと思われた、その時。

すぐ目の前に、人形の顔が。

「！」

悲鳴は上がらなかった。

心臓が止まるかと思った。

悲鳴が出せなかったのは、人形の柔らかい手がアルバの口を塞いだ為で、いつのまに近くまで来たのか、生意気にも空中にふかふかと浮いている。

「お願いだから静かにしてよ」

「無理」という彼女の返答は、残念ながら「うう」といううめき声に変わった。

だいたいどうして不法侵入者であるこの人形の言う事を聞かなければならないのか。

「静かにしてくれるなら、手を離すよ。………静かにする？」

心臓はまだバクバクと早鐘のように打っていたが、このまま口を塞がれ続けるのはいささか苦しい。

選択肢が今の自分に無い事を知って、とりあえず、アルバは震える手で人形に「ちょっと待って」と意思表示をした。

しばらくして震えがおさまってきた所で、やはり手で承諾のサインを送る。早い話が、右手の親指と人差し指で丸を作ったのだ。

口から人形の手が離れた。大きく息を吸って、新しい空気がどつとアルバの肺に送り込まれた。

ひとまず何度も深呼吸を繰り返す。

目の前には、いまだ人形がふかふか浮いている。

「お願いだから」

人形はもう一度言った。

「騒がないで。無理を言ってるのは僕も分かってるんだけど、騒がれると困るんだ」

「……………とりあえず、あんたは何者？」

そう言った後で、アルバはもう一つ付け加えた。「普通の人形じゃない事だけは確かだけど」

普通の人形は、歩かない、浮かない、と言う以前に動かない。おまけに言うならしゃべったりもしない。目の前の人形の糸で縫われただけの口も、けして上下左右に動いたりはしていないが、確かに「声」は耳から入ってくる。

「僕は、人形じゃない。僕は……………ねえ、疑わないでね。僕は、四月の精霊なんだ」

念をおすように、慎重に、人形はその言葉を口にした。

「四月の精霊？」

思わず語尾が上がる。

「四月の精霊っていったら、今はモースの館にいるんじゃないの？」

モースの館は、この国を治める精霊がいると言われている施設だっ

た。一月ごとにその主は変る。四月なら四番目の精霊が、五月なら五番目の精霊が。

十二人の精霊は、一年を十二に分けた。

今は四月。言い換えるなら、十二精霊の四番目、エプルの治める月。

その肝心要の精霊が、今、アルバの目の前にいると言うのだ。治める精霊が不在の月など、聞いたことも無い。

「その話が本当なら……」

疑わしげなアルバの言葉に、人形は声を強めていった。

「本当だよっ」

「……じゃあ、あなたはエプル？」

精霊の姿形などみた事は無いが、こんな人形が確かに精霊なのだろうか。

「そう。僕はエプル。こんな姿じゃ、信じられないのもわかるけど、だけど、僕は確かに四月の精霊なんだ」

「精霊の姿なんて知らないけど、だけどその外見は確かに人形だわ」

「これには色々わけがあるんだ」

人形は顔を下に向けアルバの方を、斜め下から見上げるように見て、もう一度言葉を繰り返した。

「……深いわけが」

アルバは深いため息をついた。鼓動も正常に戻りつつあった。先程は心臓が止まるかというぐらい驚いたが、今日の前にいるしよぼくれた人形を、もう怖いとは思わなかった。ひとまず自分がさっきまで座っていた寝台を指差して、彼女はこう言った。

「とりあえず座って話しましょう。立ったままじゃ疲れるわ」

はたして人形が疲れるのかどうかは疑問だが、エプルを名乗る人形は、アルバの言う通りに寝台へと腰をおろした。

随分短くなり、もう消えそうになっていた蠟燭の代わりに、新しい蠟燭を一本、鏡台の引き出しから取り出す。

「蠟燭代も馬鹿になんないのよね……」

しかし暗闇で話を続けるのは論外だ。まだ残っていた火をその蠟燭にうつすと、部屋の中が先程よりも明るくなった。

辺りは静まりかえっていた。

アルバ達が起きているこの部屋以外、もう皆夢の中を旅しているのだろう。

人形が再び口を開くまで、同じように寝台に座り、新しい蜜色の蠟燭を見つめた。

「実は僕………僕さ、この人形の中に、閉じ込められちゃったんだ……」

隙間から入ってくる風に、蠟燭の火が三回揺れた後、人形はそう切り出した。

「人形の中に閉じ込められた？」

「この人形、今はあちこち動いたせいで薄汚れてるけど、僕の所にきた時は、もつと綺麗な人形だった。僕達精霊への捧げ物の中に一緒に入ってた人形で、今までに無い捧げ物だったから、ちよつと興味がわいて……」

「手を出したらそうなったと、そう言いたいわけね」

アルバの言葉に、人形は慎ましやかに頷いた。

「突然人形の中に吸い込まれて、出ようと思っても、でられなくて……それで」

「それで、どうして私の所にきたわけ？」

アルバと精霊の間に、接点は存在しない。せいぜい昼間、共用の井戸で水汲みをしていた時に、人形を発見し、手に取ったぐらいだ。

「この辺に、精霊医がいるって聞いたから」

「精霊医？」

「人間の医者と同じだよ。精霊医は特別魔力が高くて、僕達精霊の力や存在が不安定になった時、その魔力で補ってくれるんだ」

「魔力を補う？」

「簡単に言つと、弱った精霊に、魔力を分けてくれるんだ」

精霊は自然の力の結晶体だから、魔力が極端に減ってしまうと消滅してしまうんだ、と人形は続けた。

「精霊医って、人間なの？」

「そう。この辺に住んでるって、大分前にだけど仲間から聞いたことがあったから……もしかしたら、精霊医ならなにか解決法を教

えてくれるんじゃないかと思って」

「この辺に、そう言う人が住んるって話聞いたことないけど。じゃあなんで私にひつついてきたの？」

「君から、薄いけど魔力を感じたんだ。精霊医特有の、ひどく優しい魔力。だから、きつと君の家が精霊医の家なんだって、思ってたんだけど……」

「目当ての人はいなかった、と」

当然だ。ここはアルバの曾祖母の代から普通の民家だ。

もしかしたら、それ以前に住んでいた人が、精霊医だったのかも
しれない。

「……………精霊医はいなかったけど、君に精霊医と同じ魔力があったから……………」

「だから深夜に人の部屋に乱入したわけ？」

「だって！ ここまできて、精霊医はなくて、何の解決法もわからないんじゃないじゃ、僕もどうしていいかわからなくて……………」

人間は追い込まれると意外な行動に出るとよくいうが、これは精霊にも当てはまるのだろうか。

人形の落ち込むみようは相当で、まるでこちらが弱いものいじめをしているような錯覚さえ起こさせる。

アルバはもう一度、先ほど以上に深い溜め息をついた。

「名前は？」

「え？」

「その、精霊医だって人の、名前。まさか、名前もわかからないの？」

「わかるよ。えっと、確か……………ミチエ？ ああ違う。リチエ。そう、リチエ・リーンて言う人だ」

その名前を聞いた途端、アルバの顔はとても苦い顔になった。聞かなければよかったという意思が、その表情にありありとでてくる。

「どうしたの？ 知ってるの？」

「……………」

長い沈黙の後、不安そうな人形を前にアルバはついに口を開いた。

「……………知ってるわ。よく、知ってる」

そうして、苦い顔でさらに続ける。

「リチエ・リーンは、私の祖母よ。……………三年前に、亡くなったけど……………」

アルバのその言葉は薄暗い部屋にひっそりと響いた。

03・謎多き人

よく考えてみれば、祖母は不思議な人だったかもしれない。

幼い頃の記憶を、思い返してみる。

いつも常に微笑んでいる人だったという印象があった。実際、祖母の怒った顔を、アルバは一度も見たことはなかった。

幼い頃、まだアルバが夜を怖がっていた時、夜は怖くないものだと、教えてくれたのは祖母だった。

月の光の下でこそ、普段見えないものがよく見えてくるもの。

月のない夜には精霊達の集会が開かれ、この国の行く末を話し合うんだと、昔話を聞かせるように語ってくれた。

夜は、けして怖いものではない。

夜は静寂。

夜は安らぎ。

精霊の加護があるこの国の夜は、けっして恐ろしいものではないんだよと、何度もアルバは教えられた。

それ以来、夜に怯える事が少なくなった。

アルバはそんな祖母が好きだった。

他の大人は、空想的な話や、御伽噺をいつまでも読むのはやめなさいと言つのに、一言もそんな事を口にしない。

好きなようにしなさい。

好きな事を求めなさい。
それがきつと、お前を将来導くものになる。

何度も言われたその言葉は、今でも、目を閉じれば祖母の声そのままに聞こえてきそうだ。

祖母が亡くなったのは、病気で事故でもはなく寿命で、最後は眠るように、目を閉じて息を引き取った。

『お前の成すべき事をなさい』

それが、祖母がアルバに送った、最後の言葉。
成すべき事。

(……………今のこの状況も、成すべき事に入るの？ お祖母ちゃん)
長い長い思考から抜け出して、ようやくアルバは今を見つめた。

アルバと(自称精霊を名乗る)動く人形が、彼女にとって不本意な遭遇を果たしてから、時間は二日ばかり経過していた。

あれから、アルバは明け方までこの人形に、脅され、泣き落とされ、結局彼が元に戻る方法を探すのを手伝う事になってしまった。

このまま見捨てたら一生呪ってやるとまで言われて、頼みを断れるはずがない。

精霊の呪いは、昔から恐ろしいもの一つとして伝承があるぐら
いだ。

命が惜しければ、精霊をけっして怒らせてはならない。それは、
この国の誰もが知っている話だった。

そもそも、あの運命の昏間に遭遇してしまった時点で、それは既
に決定事項だったのかもしれない。

とりあえずその次の日は眠気に勝てず、実際に行動をおこしたの
は、原因の発生日から二日目のことになった。

まずアルバは、母のエルマに、祖母の事を聞いてみた。

祖母の周りに何かおかしなことはなかったか？

「何もないわよ」返答は簡潔だった。

「おかしな子ね。どうしてそんな事急に聞きたがるのかしら」

エルマは怪訝そうな顔をして娘にそう尋ねた。

「目の下にクマなんて作って。おおかた、また夜遅くまで本でも読
んでたんでしょう。まったく、いい年をした娘が……」

そのまま始まったお説教に、アルバはすっかり二時間も捕まっ
てしまった。

次にアルバは父のアイオスに尋ねた。

父は祖母の一番下の息子だった。

「さあねえ……………。何かあったといえ、あつたんだろっけど。お祖母ちゃんは秘密が多い人だったからね」

「秘密？」

「ああそういえば、私がまだ幼かった頃に、何年かに一度、新月の夜にどこかに出かけていたのは覚えてるよ。帰ってくるのは、決まって次の日の夜だったね」

「新月の夜に外へ？」

その言葉に、アルバは祖母に聞いた話をふと思い出す。新月の夜は、精霊達が集まって、この国の将来を話し合うという、御伽噺。

「まさか、精霊達の集会にでもいったの？」

「おや、懐かしい事を言うねアルバ。精霊の集会か。私も昔よく聞かされたもんだ。……………そうかもしれないな」

アイオスは、何度もその言葉を口の中で繰り返したあと、もっともらしく頷いた。

「それで、どうして急にお祖母ちゃんの話になったんだいアルバ？」

その問いかけに、一瞬だけアルバは本当のことを言おうかどうか迷った。

アイオスは祖母に近い人だ。

本当のことを話せば、もしかしたら力になってくれるかもしれない。

けれどすぐに考えを改める。

(余計な事に巻き込まれるのは、私一人で十分だわ)

「お祖母ちゃんの夢を見て、それで、聞きたくなつたの」

結局、アルバはあたりさわりのない言葉でごまかした。

「夢を？ そうか。じゃあ何かあるのかもしれないな。お祖母ちゃん
の事をもつと知りたかったら、イスの村にいるミラ叔母さんを訪
ねたらどうだ？」

「ミラ叔母さんを？」

イスの村とはこの街から北東の方角の、山の中腹にある小さな村
だ。

ミラとは、アルバの祖母の末の妹で、アイオスの叔母にあたる人
物だ。

祖母とは随分年が離れていたせいか、未だに存命でイスの村で暮
らしている。

「そっか。ミラ叔母さんなら、何か知ってるかもしれないわね」

「イスの村に行くのかアルバ」

「……………うん。行ってみようかと思う。イスの村なら、そんなに
遠くはないし」

女子供の足で歩いてても、イスの村には半日でつける。

とにかく行動をおこすなら早いほうが良いとアルバは考えた。

あの人形との関係を早めに切ってしまう良かったからだ。この先
一生付きまとわれでもしたら大変だ。

「明日」アルバは父親にむかってそう話した。「明日イスの村に行
つて来るわ」

それからアルバは部屋に戻ると、ベッドの上で、暇をつぶすかのように彼女の本を読んでいた人形を摘み上げた。

「うわっ！……なんだあ、アルバか」

「なんだ、じゃないわよ。母さんたちが入ってくるかもしれないんだから、そんな人形らしくない行動は謹んでよ」

「だって、暇だったから」

人形の表情は動かないが、もし動いていたら、見事な膨れ面が見られただろう。そんな言い方だ。

「仮にも精霊が、だって、なんて言葉使わないで」

「偏見だよ。僕達は存在意義以外、人間とあんまり変わらないのに

……」

「………精霊は何よりも神聖で尊いものだって教えられたのよ」

「誰に？」

さも迷惑だといわんばかりに人形が言った。

「幼年学校で」

この国の子供たちは皆、四歳から十歳まで幼年学校に通う。

学校はこの街にしかないから、街から遠く離れた村では、大人たちが学校の代わりを果たしていた。街に親類縁者がいる家は、子供をしばらくその家に預けたりもする。

学ぶのは基本的な文字の読み書きと、この国の歴史だ。精霊は尊く、敬うべき対象として教えられる。

アルバも、学校に通っていた。

しかしどうにも、この精霊は敬う気になれない。

もつとも、そう習ったからといって、必ずしも誰もがその存在を信じるというわけではなかったのだが。

「教科書を見直したほうがいいよ、それ」

「私もいまはそう思うわ」

「確かに堅い精霊もいるけど。少なくとも、僕の知ってる中では九月の精霊が一番堅いね」

「他の精霊は………いえ、やっぱり何も話さないで。……あ」

そこでアルバは、この部屋に戻ってきた当初の目的を思い出した。

「お祖母ちゃんの話、やっぱりそんなに聞けなかったわ」

「………そう、かあ」

「でも」

しょんぼりと肩を下げ、顔をうつむかせていた人形は、その言葉を含図にぱつと顔を上げた。

「イスの村に、お祖母ちゃんの末の妹が住んでるのよ。ミラ叔母さんって私たちは呼んでるけど」

「その人が、何か知ってるの？」

「知ってるかどうかは分からないけど、訪ねてみるだけの意味はあるかもしれない。お祖母ちゃんの姉妹だし」

だからと、アルバは話を続けた。

「明日、イスの村に行きましょう」

「うん。………ありがとうアルバ」

人形は言葉の最後に小さくそう呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9951q/>

十二精霊物語

2011年11月16日22時21分発行